

平成22年度(第38回)沖縄県大学図書館協議会
— 総会・講演会 —

講演会

講師：高宮城繁（名桜大学教授・図書館長・昭平流空手道範士十段）

評釈者：新里勝彦（沖縄国際大学名誉教授・元図書館長・松林流範士九段）

演題：文武両道の思想の系譜－日本・中国・沖縄に見る当該思想－

文武両道の思想の系譜－日本・中国・沖縄に見る－

－ レジュメ －

はじめに－わが日本に伝わる文武両道の思想には、特定の創案者とか創始者とかとよばれる人々はいない。不特定の日本人が一千年近くの歴史の歩みの中で創意工夫をこらしながら考案してきた知的所産であり、国民思想・国民文化である。時の風雪に耐えてなお斬新な生命力をもつものを我々は真理とよび、思想とよび、哲学と呼ぶ。

そういう文武両道の思想を説くためには先ず序論ともいうべき「武」「武道」「武士道」に触れる必要がある。これから当該思想の歴史的流れを概観するが、文武の「文」についてはまたの機会にゆずりたい。

I. 「武」の字義と「道」の観念

1. 会意文字としての「武」の字義

1) 「戈」を「止」⇒ 和の思想(2世紀初頭の後漢の許慎著『説文解字』(中国最古の字典・中国文字学の基礎)⇒ 儒家の伝統的解釈：武徳によって世を治める平和主義のシンボル、《文治主義》。

2) 「戈」を持って「進む」⇒ 戦いの思想(中国語学者・藤堂明保著『「武」の漢字「文」の漢字－その起源から思想へ－』(徳間書店 1977年)⇒ 「戈(武器)」をもって止(あし)で進むこと《武断主義》。「止」は「足」の変形。武勇・武力・武術・武芸等が派生。

「武」の字義 ⇒ 和戦両様の性格

理想: 戈を止める = 不殺の誓い(精神) ⇒ 止戈興仁(戈をおさめ仁をおこす) 現実

: 戈を使う = 必殺技の練戒(技能) ⇒ 干戈控慥(たえず干戈を交える)

2. 会意文字としての「道」の字義

1) 「首+しんによる」 ⇒ 頭をある方向にむけて歩くこと

- ① 人畜車馬の往来する所(道路)
- ② 人の守るべき物事の筋道(人道・神仏の教え)
- ③ 手段・方法(技を磨く手段・方法)

2) 先人の残してくれた既成のみちなのかー脚下照顧の精神//これからある方向に切り開いて行くみちなのかー未来指向の精神

3) 読み方(原則): 「みち」ー単語として使う(道を行く、道がちがう、道をあやまるな)
「どう」ー複合語として使う(武道、歩道、天道)

例外: 老子(儒家の祖・孔子〈B.C.551～B.C.479〉より100年後の思想家・道教の祖)ー東洋に伝わる「道」の概念を「道の道とすべきは常の道にあらず」と説き、無意自然の道こそ道德の絶対的なもの、純一無雑の精神こそ尊ぶべきであると考えた。

(道又無ン道ン チュヒサ マタ チュヒサ インジャイチャイシチド道ヤアツチュル)
(北島スミ子) 人の道の探求は、試行錯誤的な努力の積み重ねを経てこそ、その結果を得るものだ。

II. 「武」の道とは、「武道」とは――。

武道とは何か、多種多様の考え方がある。一般的には《武道とは柔道、剣道、空手道、杖道、合気道、弓道、棒術、槍術、短刀術、馬術等々日本の伝統的な武術・武芸の総称》であるが、本来は武士の在り方(武士の道)を問う方法の一つである。

◎武士の道 { 1, 心法 (精神的要素の強い教養《儒教・神道・朱子学・陽明学等に支えられた学問によって修得されたもの》)
2, 技法 (技術的要素の強い教養《心技体一如の鍛練によって修得されたもの》)

◎武道 ⇒ 武士が武士道を実践するための精神的・技術的手段で、その内実は「武士道」と「士道」の二つにわかれる。

Ⅲ. 武士道と士道 ——。

「武士道」－「わが国の武士階級に発達した道徳、鎌倉時代から発達し、江戸時代に儒教思想に裏づけられて大成、封建支配体制の観念的支柱をなした。忠誠、犠牲、信義、廉恥、礼儀、潔白、質素、儉約、尚武、名誉、情愛などを重んずる」（『広辞苑』）

「騎士道」－「中世ヨーロッパで、騎士身分の台頭によって起った騎士特有の気風。キリスト教の影響をも受けながら発達、忠誠、勇気、敬神、礼節、名誉、寛容、女性への奉仕などの徳を理想とした。」（『広辞苑』）

武士道の解釈の仕方 {

- 1, 広義の士道（主従関係は、相対的〈変更可能〉）－代表的儒学者・山鹿素行（1622～1685）『武教要録』『山鹿語類』
- 2, 狭義の武士道（主従関係は、絶対的〈変更不可能〉）－教書『葉隠』（1716年頃）－佐賀藩に伝わる武教書。山本朝常〈口述〉・田代陳基〈筆記〉。書の冒頭を飾る文言「武士といふは死ぬことと見付けたり」（平時戦時を問わず、死の潔さを説く）。天皇絶対思想を鼓吹するために明治以降の軍部が利用。－「戦陣訓」（昭和16年、東条英機陸相の名で全陸軍に下された、戦時下における将兵の心得 全10条。島崎藤村作文。）玉碎戦法・特攻作戦を正当化する論拠。

死生観（死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり、生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を尽くし、従容として悠久の大義に生きることを悦びとすべし。）

名を惜しむ（恥を知る者は強し。・・・生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ。）

「軍人勅諭」（明治15年－明治天皇）－五ヶ条：忠節・礼儀・武勇・信義・質素

Ⅳ. 古文献に見る「武芸」と「武道」 ——。

「弓矢取る身の習い」－源為朝（1139～1177年）、剛勇で弓術に長じた悲劇の平安末期の武将。鎮西八郎為朝とも称する。「保元の乱」で上皇方として奮戦したが、敗れて伊豆大島に流され、後日自殺。

為朝を主人公とする『保元物語』（1156年刊、作者不明）は、武士独特の武家意織の芽生えと、その在り方を「弓矢取る身の習い」と表現。「弓矢取る身は大將軍の

前にては、親死に子討たれるとも顧みず弥が上にも死に重なって戦ふとぞ聞く」のように、恩顧を受けた主君の馬前に討死することであった。」(相良享 — 『ブリタニカ国際百科事典』〈17〉) この「弓矢取る身の習いは」は武家社会に伝統として受け継がれた。今を溯ること854年前のことだが、それ以来その延長線上にあるのが「武士道とは死ぬ事を見付けたり」で有名な『葉隠』(1756年)の武士像であり、以後武士の生き様を規定する伝統となった。この伝統を支える武士の必須要件としての武技を「武術」「武芸」「武道」とよぶが、これらは時代々々をこえて随時使われた不変の武技用語である。

1. 武術(必殺至上主義の力学価値) — 昔から現代にかけて日本伝武技の呼称として用いられてきた用語。琉球方言「手」^テと同じように、時の風雪に耐えてなお言葉として社会的機能を失わない。
2. 武芸(型を通した美学価値) — 学芸に対する武芸で、江戸時代以降、戦国期の武術に美学価値を付与して型文化に昇華したもの。文献上最古の武技用語である。

(例) 『日本書記』(奈良時代前期の日本最初の勅選の歴史書—720年)
「^{すいぜいてんのう}綏靖天皇(神武天皇の第三子) ⇒ 「天皇、^{きぎよく}風姿^{わか}岐嶷、^{おお}少くして雄^お技之^{しきいき}氣有^{おとござかり}します。牡^{いた}に及びて「^{れい}容貌^{れい}魁偉、**武芸**人に過ぎて、^{ししょうしんき}志尚^{すいぜいてんのう}沈毅にまします。」(天皇は綏靖天皇ご様子が人に秀でぬきんでていて、幼少の頃から抜群に雄々しい気性であって、牡年に及んではお婆も大きく立派で、**武芸**も人よりすぐれ、お志は沈着剛毅であられた。)(小島憲之・他注注・訳『新編日本古典文学全集2—日本書記① 小学館 2002年』

3. 武道(人格陶冶手段としての精神価値) — 武の道を実践するための手段。武道とは剣道・柔道・空手道・合気道・柔道・杖道・槍道・相撲道等「武芸十八般」の総称。

1) 『^{あづまかがみ}吾妻鏡』 = 『東鑑』鎌倉幕府の事績を記した公的記録としての史書、編者不明。
「熊谷次郎直実法師、京都より参行す。往日の**武道**を辞し、来世の仏縁を求めて以降、偏に心を西利に撃け、終に跡を東山に晦ます。」(熊谷次郎直実(?~1208年)鎌倉初期の武士次郎直実と通称。一ノ谷の戦(1184年2月源義経は鶴越の[■]を一ノ谷(神戸市)攻め下り、平氏を海上に敗走させた。その時に源氏の熊谷次郎直実が平氏の若武者平敦盛(少年)を斬った話は有名。)

2) 『太平記』(1371年—小島法師・他編)南北朝時代の軍記物語、『平家物語』に次ぐ軍記物語の代表作。「征夷大將軍の位を賜り、天下の**武道**を守る可し」として武士の守るべき道を説く。

V. 文武両道の思想—日本・中国・沖縄の歴史に見る——。

文武両道—文事と武事、学問と武芸を兼ね備えること。鎌倉時代以来今日まで800年余りにわたって日本人が培ってきた国民的伝統思想。武家社会（鎌倉時代～江戸時代までの約680年）での両道の実践者は武士階級だが、士農工商という封建的な身分制度が崩壊し、四民平等の社会が出現した明治維新以来、その担い手は一般的国民となる。そして、今や日本人の理想的な人生観の基礎要件となっている。その歴史的経路は概略次のようなものである。

1. 胎動期（公家・貴族社会）—奈良時代から平安時代にかけての10、11世紀。
統治者間には文武二道論を処世術とするほどの意識の芽生えはなく、公家・貴族社会では、文事、武事は観念上別々のものであった。
2. 生成発展期（武家社会）—武家が統治者となった鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土桃山時代の12世紀から16世紀にかけての武家の躍進に伴って文武両道論が胎頭し、発展発達期となる。鎌倉期の武家社会になると、ただ武芸に堪能というだけでなく、歌道（和歌）・書道をはじめとする諸芸を身につけることが武士の教養として重要視される。
3. 完熟期（武家社会）—徳川時代（1603年—265年続く）になると、徳川政権の基本綱領となり、文武両道は「武家諸法度」の筆頭を飾る武士階級の存在様式を決定づけるものとなる。武断政治から文治統治へと政策を変換をするにつれて、儒教などもかかわって文武両道の思想は完熟した。
4. 大衆受容期（市民社会）—明治になり、士農工商の身分制崩壊と共に文武両道の思想の実践者は一般市民となり、以後、国民思想・国民文化として定着し、その観念は変わることなく今日まで150年近くにわたり、日本人の思考様式に大きな影響を与え続けている。

VI. 日本・中国・沖縄の歴史に見る文武両道の思想

1. 日本の場合——。

◎戦国期の武術— 必殺至上主義の武術（文は必要とするが、第二義的なもの—

戦国時代独特の下克上の風潮)

◎江戸期の武術 — 神武不殺の武動 (文こそ第一義的なもので、必殺至上主義はその背後の理念となる — 泰平の武芸)

- 武士の教養
- 1. 文としての教養 — 儒教 (孔子)・朱子学 (儒学の諸説を集成した儒学の一派幕府公認の学問 — 朱熹)・仏教・神道
 - 2. 武としての教養 — 武芸一八般 (弓術・馬術・槍術・劍術・水泳術・抜刀術・十手術・銃銃 (なべ・かま)・含針術・薙刀術・砲術・捕手術・棒術・鎖鎌術・〃術 (もじり一槍の一種)・忍術)

武士必須の教養としての武術⇒劍・槍・弓・馬・柔・砲の六術+兵法⇒武士の七芸

◎武家諸法度 — 徳川幕府が武家の守るべき義務を定めた法令。その第1条が文武両道の思想を公式に決定づける。

法度 (武家社会の法令 — 約700年 (鎌倉 (1192年) ~ 幕末 (1867年))

江戸時代の三大法度 (幕府による支配身分統制の基本法令)

武家諸法度 (武家)

禁中並公家諸法度 (天皇・公家)

諸宗諸本山本寺諸法度 (寺家)

◎武家諸法度 (1615 (元和元) 年発布) — 大阪落城12年後、徳川家康施行 (金地院 (以心)) 崇伝草案、漢文体の13条。

○第一条 文武弓馬の道もつばら相嗜むげきこと。文を左にし、武を右にするは、古^{いにしえ}の法也、兼備^{かねそな}えずんばあるべからず。

二代秀忠、三代家光、四代家綱、五代綱吉等の時代に若干の改訂が加えられ、条項も15条、19条と変わるが、五代綱吉の時に第1条の「弓馬の道」が「忠孝」へと条文も変更され、最終的には15条に落ちつく。

◎第一条は「文武忠孝を励まし、礼儀を正すべきこと」と変更され、「文武両道+儒

教」という構図をとるようになった。→以後、15代将軍慶喜まで踏襲された。

時は1868年、明治元年である。この年をもって武家社会は滅亡し、士農工商の頂点に君臨してきた武士階級も消滅し、世は四民平等の「市民社会」となる。だが、武家社会が後世に残した文武両道の思想は、今日の日本人像の思想形成手段として大きな影響力を持ち続けてきたことに変わりはない。それは、鎌倉時代から今日にかけての800年余りにわたって基本的に変わることなく、時の風雪に耐えて、時代々々をこえて生き続ける日本人独自の伝統思想であり、日本人の生き方を方向づける人生哲学である。これからも変わることはないであろう。

2. 中国の場合 ——。

中国最古の拳法書として知られるのは『手博六篇』（史家・班固著『漢書』芸文志』所収）である。手博とは中国拳法の古称。「芸文志」には早くも〈剣道38篇〉が登場している。それ以前の儒家の祖・孔子（B.C. 511～B.C. 479年）の前後にはそれ相当の練度の高い武術が生成発展している。従って、中国古代の史書や文学書に見られる拳法用語は枚挙にいとまのないほど多い。

前漢（B.C. 206～A.D. 8年）の武帝は外征・内治に文武両道の策を用いて国家組織を完成した。武帝は『詩教』『易教』『書経』『礼記』『春秋』を儒学五経書とし、それらの文義に通じた五人の学者を五経博士として厚遇した。『詩教』は中国最古の詩集である。

次に『詩教』『春秋』（穀梁伝）『管子』『史記』等に文武両道を記述したものだけを拾ってみよう。

『詩教』 — 文武吉甫（文あり、武ある^{いんきつぽ}伊吉甫）、文武是憲（文武の手本）、
文武維后（文あり、武ある^{きみ}后）、允文允武（文あり、武を^{いんぶんいんぶ}そなえる）。

『管子』 — （管仲著 — 思想家・政治家）有拳勇股肱之力 — （拳術に卓越した力のある勇者）

管仲は人材登用策として文武兼備の勇者を求める。

①武人の資格要件 — 拳技に秀で、勇気があり、体格が立派で、力のある剛の者⇒「才」とよぶ。

②文人の資格要件 — 聡明の士⇒「賢」とよぶ。

参考：「^{そうりん}倉廩実則知礼節」衣食足則知荣辱」（『管子』（牧民篇））

（米倉満ちて礼節を知る、衣食足りて荣辱を知る。 — 道徳意識の高揚は物的充足を前提とする）

『春秋』（穀梁伝 — 左丘明著） — 古者雖有文事必有武事（学問にすぐれている者は必ず武備あり）

『史記』（司馬遷著 — 中国最初の正史） — 有文事者必武備、有武備者必文備（人の上に立つ者は文武両道を等価的に身に修める必要がある）

以上、中国の古文献に彼国の文武両道論をみてきたが、わが日本のそれよりも2000年以上も先を行く歴史的な事実があったことは、驚きである。徳川幕府のように制度化した思想の体系のような事象はみられないにしても、我々は中国の歴史の長大で奥深い資質を痛感するものだ。

3. 沖縄の場合 —— 。

沖縄には昔から今日にかけて伝わる琉球方言として「手」^{てい} [tiy] がある。今も昔も変わらない色あせることのない日常用語である。手・取っ手・手腕・技・術・手段・方法・唐手・空手等のように多義語である。武技用語としての実例を数例をあげよう。

- 「ティーチカイン」（空手を演じる）
- 「ティーヤガンジューサン」（空手が強い）
- 「ティーチカヤー」（空手家）
- 「ティーンヌハナシ」（空手の話）

この「手」^{てい}を「空手」と考えるかどうかについては議論が付きない。実体不明だという向きもあるが、この常用語として伝統を持つ、機能語としての方言自体が古流空手としての「手」の存在証明であるといえよう。

国立国語研究所編『沖縄語辞典』（初版は昭和19年）には「文武両道」に相当する表現様式ははい。我々がよく耳にする「手墨学問」（テシミガクムン）は「習字や読書。すなわち学問。」とある。

学問は、「シメーシッチ ムノーシラン」（学問はあるが、常識に欠ける。論語読みの論語しらず。）にみるように「シミ」である。武芸学問（ブジィー ガクムン）は標準日本語の沖縄での方言読みで、琉球古来の方言としての表現様式ではあるまい。

「手墨学問」を「文武両道」として使って昔人もいる。名護聖人こと名護親方、文（程順則〈1663～1734年〉）は朱子学と詩文に秀で、一生を儒教道德の鼓吹につとめ、師弟教育にあたった。彼は自作の「いろは歌」の「て」の項で次のように詠んでいる。

手墨勝れてん 智のざ勝れてん

肝ど肝さだめ 世界の習や

学問がすぐれていても、才智に長けていても、世の中で一番大事なものは心だ。世の中で心にまさるものはない、と喝破しているわけである。

また、屋嘉比朝寄（1716～1775年—三味線音楽に堪能で、琉球ではじめて三味線の音譜、所詮屋嘉比書流し工六四〈クルルンシー〉を考案し、117曲を採譜した人）は自作「十番口説」で次のように詠んでいる。

二番 武士の第一や手墨学問よく習て親の孝行めでいすし

侍は文武両道を身に修め、親に孝行をつくすことを第一と心得るべきだ、と説いているのである。

手墨学問	{	1. 文武両道を意味する複合表現
		2. 学問のみを意味する複合表現

VII. 我、今だ及ばず。されど、この道を行く——。

1. 西洋に見る武士道の実践 — Sir Philip Sydneyの従容たる死

フィリップ・シドニー卿は英国の詩人で、Flushingの知事。彼は、1586年8月に、スペイン軍に包囲されたZutphen 救出作戦に志願兵(将校)として参戦した。スペイン軍輸送部隊を攻撃中に左大腿部を撃たれ、頻死の重傷を負い、26日後に死んだ。彼はそういう自分を顧みることなく、同じ戦場で重傷を負い死にかけている兵卒に「貴官は余よりも重要な軍人だ」と言いながら自分の水筒の水をあげた。

この従容たる姿勢こそ真の武人としての賞賛に値するものである。日本のように武士道にまで昇華された思想はなくても、フィリップ卿の従容として死につく態度は日本の武士道の地で行くようなもので、鑑となるものである。

以下、原文（ゴシック部分は引用者による）を紹介しておきたい。この資料の提供者は名桜大学学長・瀬名波榮喜氏である。

In September of 1586 with the forces of Sir John Norris, he took part in an attack on a convoy of provisions near Zutphen. Just before the attack he had removed his leg-armor because his friend Sir William Pelham was starting without any... Unfortunately a bullet hit him in the left thigh, and though he succeeded in riding back to camp, he died twenty-six days later, braving

without protest the painful treatment of his surgeons. He even composed a song about his own wound, entitled "La cyusse rompue." The well-known story told by Greville, that the wounded Sydney gave his own bottle of water to a dying foot soldier with the words, "Thy necessity is greater than mine" is typical of the man, even though it be an apocryphal. (The Golden Hind: An Anthology of Elizabethan Prose and Poetry. ed. Hallett Smith (W.W. Norton ,1956) P.11

2. 「範士十段位を授与されるにあたって——。

1957年4月、上地流の上地実英師の道場に入門した。それ以来今日まで53年になる。その間、友寄隆宏・与那覇政昌・稲田弘・仲程力氏等範士十段をはじめとする多くの人々の薫陶をうけながら、空手道一筋の道を歩んできた。「もう範士十段の資格要件は十分にみたしているから」と最高段位への推拳を受け続けるも、その器にあらずと断ってきた。

だが、後輩の足を引っ張るのは傲慢で武人としての配慮に欠けると指摘され、それ以上むげに断るわけにも行かず、不本意ながら諸賢の勸説を受け入れることにした。

この先輩後輩の思いの背後にある思想は儒教の「五倫の教え」である。儒家の祖・孔子は人間関係でこの五倫の道を最重要視している。五倫とは、次のような人の守るべき五つの徳目である。

父子間の親
君臣間の義
夫婦間の別
長幼間の序
朋友間の信

この四番目の徳目「長幼間の序」とは、平たく言えば、師弟間の間柄・先輩後輩の間柄・老若の間柄・上下の間柄等を全うするにあたっての人の守るべき礼節としての道である。「範士十段位」勸奨を断ることが出来なかったのは、この徳目の実践が強く迫ってきたからである。すなわち、後輩の存在があるからである。

範士十段位の荣誉を自らすすんで受け入れることが出来なかったのは、武人としての心技体が三位一体としては熟していなかったからである。技を練り、体を鍛える点では修行歴相応の条件はみたしているとの自負はあったものの、心を磨く次元では不足感ばかりを強く覚えたからである。

だが、今は心技体の鍛錬が三位一体になれるように頑張ることが武人としての自己を生かす唯一の道であると考え次第である。とはいえ、自分の思う自己実現の日はるか彼方にあるように思う。

吉田兼好の『徒然草』(鎌倉時代後期の随筆集)は「日暮れて途遠し。吾が生既にしょう

蹉^へたり」と記すが、このことを念頭におきながら、武人としての道を一步一步あるき続けて行くつもりだ。迷いと蹉^へは昨日もあったし、今日もある、そして明日もある。それでも「愛宕山 入り陽のごとく 赤々と 残れる命 燃やさんと思う」（西田幾多郎）が現在の心境であり、今後も空手道一筋の道を着実に歩み続けて行きたい。武人としての自己実現のために――。